

佐藤 慎太郎 福島/78期

王者として迎える G1 開幕戦



チャンピオンユニフォームに袖を通し、「追い込み選手は自分の力だけでは勝てないですから、ラインの選手に対する信頼だったり、感謝の気持ちを忘れないように走っていきたく」と再度、気を引き締めた佐藤。そんなグランプリ王者が、今年一発目のG1を迎える。

「競輪を知って日が浅いファンは、俺のことをチャンピオンっていう意識で見て車券を買うことになる。競輪の新しいファンを獲得するためにも、そういう責任を持ってレースを走りたい」

全国の競輪ファンの期待を背負い、今年はさらなる活躍を誓う。「全日本選抜は去年、(準Vで)グランプリを走るきっかけになった開催ですからね。もう期間は短いですけど、やれることはやって備えます」。03年当大会以来のタイトル奪還へ全力を尽くす。

平原 康多 埼玉/87期

手応えをつかんで 地元記念V



「グランプリに出られるのが決まってからは、ずっと練習、練習できてましたから」

7度目の大宮記念を制した平原康多が、ほっと一息をついた。10回目のグランプリが終わると、年末年始も変わらず競輪モード。気を抜くことなく中3日の新年の立川記念で、あらたな自転車投入した。

「グランプリではその時のベストと思って、あの自転車を使った。ただ、ナショナルチームの人たちの話を聞いて、自分の固定概念が覆されることもあった」

立川記念のシリーズ後半から手応えをつかんだ平原は、地元記念でそれを確信に変換させて優勝につなげた。

「立川の準決くらいから自転車の進ませ方がわかってきた。このあとやっとな期間が空くので気持ちをリセットします。(年間)6個あるG1の優勝を目指して」

郡司 浩平 神奈川/99期

今大会で復帰予定



SS班として迎えた20年はいきなり試練が待っていた。初戦の立川記念で初日1着スタートを切ったが、準決勝で落車失格。鎖骨骨折の重傷を負った。

「右鎖骨骨折で去年、やったところと同じです。すぐに手術をして、わりと早く退院できました。それから少しずつ練習を始めて、できる範囲でやっています。痛みはまだ残っていますが、満足のいく内容の練習ができるようになってきました」

今大会から実戦に復帰する予定。日数的にさすがに本調子とはいかないかもしれないが、できる限りの準備はするつもりでいる。

「あと2週間でG1で戦えるぐらいのところまで戻せればと思っています。SS班として全力で走り抜くつもりです」

まだ1年は始まったばかり。南関の絶対エースとして、役割を全うしよう。

金子 貴志 愛知/75期

公私にわたり入念な準備



デビューから25年、44歳で迎える初めての地元G1開催だ。「そんな日が来るとは思わなかった。楽しみだし、悔いのないように」と金子は意気込みを話す。「状態は思った以上にいい」。それでも優勝を狙うのは難しい。さらなる上積み求めて、今は新たな試みに取り組んでいる。

「平記念の前に低酸素ルームをテストしてみた。高地トレーニングと違って体への負担が少ないし、うまくいけば(普通の練習の)3倍の効果が得られるかもしれない。それで最後の追い込みに賭けてみようと思う」

練習だけではなく。本番へ向けて、ここまでさまざまな準備をしてきた。「どれだけお客さんを迎えるかを重視して、ここまで色々なPRをしてきた。それがどれだけ効果が出るのかも楽しみ」。自分のため、豊橋競輪のため。積み上げてきたものを4日間のシリーズにつぶせる。

村上 博幸 京都/86期

今年も頂点を目指す



昨年はサマーナイトでV。そして、寛仁親王牌で14年以來のG1制覇と日々の努力が実った一年だった。

「去年は良い一年やったと思います。年末はホッと疲れたが出たなっていうのはありましたけど、モチベーションを保って走れた結果だと思う」

気持ちを新たに戦った今年初戦の和歌山記念は、優勝こそ逃したが、②③①④着ときっちり決勝にコマを進めた。

「今年は前半を意識して走りたいと思っています。年間を通して対応できる状態を作りたいんですけど、最近は冬場の方が成績は良いので。歳をとるにつれて、どんなトレーニングをすれば良いのか難しくなっていますけど、全日本選抜までのプランは考えているのでしっかりやりたい」

4月には41歳になる20年も、頂点を目指して努力を惜しまない。

清水 裕友 山口/105期

初戦から気負わずに



後半戦から調子を上げ、年明けの立川記念を制するのは1年前と同じ流れ。今年最初のG1、全日本選抜に向けて流れは良さそうに見えるが「いい風を持っていけるとは思っていません」と清水は慎重に言葉を選ぶ。

「グランプリが終わってから、練習はずっと良くない。後半戦に集中した反動もあるんでしょうね。年が明けて、気持ちも緩んでるかも。でも、2月、最初のG1になればスイッチが入ると思う」

S班として初めて戦った昨年大会は二次予選で落車した。「あれから無謀なことをするのはやめようと思った」。今年は気負わずにG1開幕戦を迎える。

「1年間長いですからね。獲れたらいいな、いい成績を残せばいいなってぐらいで、気負わずにいきたい。新車もポチポチ来そうだし、間に合えばここで出したいな」

太田 竜馬 徳島/109期

昨年よりいい結果を



昨年は記念優勝4回。大きな飛躍を遂げた1年だった。今年はさらなる高みを目指している。

「去年は一昨年よりもいい成績を残せて、手応えもありました。今年はやってきたことをしっかり形にして、さらにいい結果を残せればと思っています。G1で活躍したいですね」

今年初戦の1月向日町F1は決勝6着。「新車を試したけど、あんまり感触は良くなかったです。どうするか探りながら考えます」。全日本選抜に向けて、試行錯誤を重ねている。

清水裕友、松浦悠士のSS2名を中心に輪界を席巻している中四国勢。太田もその中心選手として役割を果たす。

「いまの中四国勢は2、3年前では考えられないぐらいの感じですからね。自分もそのなかでいい勝負ができるように。一戦一戦、大事に走って決勝に乗りたくですね」

新年はG1でも結果を出す

中川 誠一郎 熊本/85期

チャンスが来たら 逃さない



ただひとり2冠に輝いた昨年、中川が3年ぶりにS班に返り咲いた。全日本選抜ではアツと驚く単騎の大ガマシを決めた。あれから1年が経とうとしている。

「連覇は狙ってできるかは、わからないけど、そういう気持ちで臨みます。あとは心の底から自分にスイッチを入れていかないと」

大宮記念から20年を始動した中川は、⑦①⑥⑨着。自力での戦いは、わずかに最終日の1日だけだった。

「(番手、3番手の)こういうところをしのいでいかないと。あとは(獲れる)展開が来た時にしっかりモノにできるように。豊橋はずっと走ってないけど、(10年F1で)3連勝で優勝したことがある。その時は(吉本)卓仁が行ってくれたんですよ(笑)」

舞台は相性のいい豊橋。中川は気負わずに天命を待つ。